

こずえと茂吉

木之内こずえ

澤下茂吉

木之内こずえ、畳の上に座わり、編み物をして夫の帰りを待っている。お腹がすこし大きい。

こずえ、胎児の足があたるのを感じ…

こずえ「お、動いてる、動いてる」

そこへ、頭に手を当てている茂吉がやってきて、玄関をがらっと開ける。

こずえ「あ、ヒロシさんだ」

玄関へ、行くと、茂吉に気づいて…

こずえ「え」

茂吉「よっ、ただいま」

こずえ「何、やってるの？」

茂吉「ま、あれだ、近くに来たからさ、ふらっと。ふらふら〜と」

と、そっと、手を頭から離す。

こずえ「え、どうしたの」

茂吉、血を流している。

と、立ちくらみのように、足が崩れる。

こずえ「きゃあ」

茂吉「大丈夫、大丈夫」

こずえ「ちょっと、こっち、こっち」

茂吉「すまん、すまん」

茂吉、こずえに支えられながら、畳敷きの居間に座わる。

こずえ、タオルを持ってきて…

こずえ「頭、どうしたの？」

茂吉「ちょっと、酔っ払って」

こずえ「ああ」

茂吉「すぐそこの、電信柱に、がんと、ぶつけてしまったんだ」

こずえ「馬鹿」

茂吉「ああ…、いてえ」

こずえ「なにやってんだか」

こずえ、笑う。

茂吉もつられて笑う。

茂吉「大きくなったなあ」

こずえ「うん」

茂吉「いつ生まれるの？」

こずえ「6月の予定」

茂吉「そうか」

こずえ「もうすぐよ」

茂吉「うん」

茂吉「そうか、そりゃあ良かった」

茂吉「こずえも、母親になるのか…」

こずえ「うん」

茂吉「あの洩たれがなあ」

こずえ「ふん。いつのことよ」

茂吉「え？ つい最近じゃないか」

茂吉「つい最近だよ」

こずえ「なによ、しみじみ」

茂吉「え？ いいじゃないか」

こずえ「私は立派な大人です」

茂吉「よく言うよ」

茂吉「なんか飲むもんあるか？」

こずえ「駄目よ、もう」

茂吉「いいじゃないか」

茂吉「祝杯だよ、祝杯、出産祝い」

こずえ「まだ生まれてないわよ」

茂吉「前祝いだよ、前祝い」

こずえ「ほんと、もう」

こずえ、酒の準備をし、持ってくる。

茂吉「お、いいねえ」

こずえ、徳利を持ち、茂吉にお酌をする。

茂吉「どうも、どうも」

茂吉「お前は、いいね？」

こずえ、かぶりを振る。

茂吉「じゃあ、いただきます」

茂吉、ぐいっと杯を干し、息をつく。

茂吉「うまいねえ」

こずえ、編み物を再開する。

茂吉「そういえば、今日、ヒロシくんは？」

こずえ「残業、残業」

茂吉「大変だねえ」

茂吉「早く帰ってこないかな、あいつ…」

茂吉「…せっかくの前祝いなのに」

こずえ「突然、やってきたくせに」

茂吉「ふふ」

茂吉「潰たれがなあ…」

こずえ「またあ」

こずえ「お兄さん、今、何やってるの」

茂吉「え、何って、飲んでるじゃないか」

こずえ「もう」

茂吉「ほら、こうやって。うまいね、酒は。うん、うまい」

こずえ「ほんと、変わらないね」

こずえ「ほら、仕事よ。何やってるの？」

茂吉「え、まあ。いいじゃないか」

こずえ「無職？」

茂吉、笑い

茂吉「すっからかんだよ」

こずえ「え」

茂吉「文無し」

こずえ「…」

茂吉「文無しってのはねえ、お金がないってこと」

こずえ「知ってるわよ」

茂吉「あ、そうか」

茂吉「もんのなし子ちゃんよ」

こずえ「馬鹿」

茂吉「ふふ、冗談だよ」

こずえ「まったく」

茂吉「大丈夫なんだ、金はねえけど、お前には心配かけねえ」

こずえ「やれやれ」

茂吉「ましてや、ヒロシくんにも」

こずえ「ばかだねえ」

茂吉「馬鹿につける薬はないってか」

と頭を搔こうとして…

茂吉「いてっ」

こずえ「もう」

茂吉、笑う。

こずえも、笑顔。

茂吉「実はさ、会社は、辞めたんだ…」

こずえ「また」

茂吉「そうよ、ただよ、また」

茂吉「カズってやつがいてさ」

こずえ「うん」

茂吉「可愛がってたんだけど」

茂吉「こいつがさ、頭のゆっくりしたやつで…」

と、酒を注ごうとするが、無いので

茂吉「あ」

こずえと目が合い…

茂吉「これ、もう一つ」

こずえ「居酒屋か」

茂吉「(手を合わせて) 頼む」

こずえ「はい、はい」

こずえ、再び、酒を注ぎにいこうとするので

茂吉「や」

茂吉、立ち上がり…

茂吉「俺、やるよ」

茂吉、酒を持ってくる。

茂吉、ふたたび注ぐ。そして、また杯を干し、息をつく。

茂吉「うめえな」

茂吉「カズが仕事ができないばかりに、会社をクビになったんだよ」

こずえ「そう」

茂吉「物覚えとかさ、そういうの」

こずえ「うん」

茂吉「難しいからさ」

こずえ「うん」

茂吉「会社が、辞めさせたんだ」

茂吉「それで、俺も、嫌になって、辞めちゃった」

こずえ「うん」

茂吉「そのあと、田舎から親御さんが引き取りに来ただけど…。あいつ、最後まで家から動こうとしなくて、俺も一緒になって…」

こずえ「お兄ちゃんらしいね」

こずえ「変わってない」

茂吉「そうか？」

茂吉、笑う。

茂吉「そうだな」

小さな揺れ。

こずえ「あ」

茂吉「ん」

こずえ「揺れてる」

茂吉「え、揺れてる？」

こずえ「うん」

茂吉「揺れてるか？」

こずえ「ほら」

こずえ、茂吉、上の灯りが揺れているのを見る。

茂吉「本当だ」

こずえ、お腹をさする。

こずえ「ほら、お腹の子もびっくりしたみたい」

茂吉「え？」

こずえ「蹴ってる」

茂吉「わかってるのか」

こずえ「さあ。でも、ほら」

茂吉「触っていいのか？」

こずえ「うん」

茂吉、こずえのお腹に手をやり

茂吉「ほんとうだ」

こずえ「でしょう」

茂吉「すごい、動いてるよ」

こずえ「うん。考えてみりゃ、当たり前なんだけどね…」

茂吉「うん、そうだけど」

こずえ「そう」

茂吉「うん」

こずえ「変な感覚」

茂吉「うん」

茂吉「生きてる証拠だ」

こずえ、お腹をさする。

こずえ「その人、結局どうなったの？」

茂吉「あ、カズか」

こずえ「うん」

茂吉「親御さんがなかば無理矢理、連れて帰っていったよ」

こずえ「そう…」

茂吉「うん、まだ働きたかったろうな…」

茂吉「世知辛いなあ」

こずえ「なんでそんなことが起こるんだろうね」

茂吉「了見の狭い奴がいるんだよ」

茂吉「(眩くように) できないならできないなりに…」

こずえ「え？」

茂吉「できなくたって、できることがあるはずさ」

茂吉「(こずえのお腹に向かって) おい！ 聞いているか」

こずえ「大きな声で喋ると、吃驚しちゃうよ」

茂吉「(小さな声で) ごめんな、驚かしちゃって。お前にはな、できることが、たくさんあるんだよ。生きてるだけで、それは、もういっぱい、あるんだ。だから、楽しみに待ってろよ」

玄関から音。

こずえ「あ、戻ってきた」

茂吉「お、ヒロシ」

こずえ「しっ」

茂吉「え？」

こずえ「驚かせよう」

茂吉「おう」

こずえ「ほら、そこ隠れて」

茂吉、そっと陰に隠れて…

了